

ミキ先生と服

河村 昭一

武田ミキ先生と初めてお会いした時、私は二十七歳。先生は、今から勘定してみると七十二歳だった。武田学園に奉職することが決まって、学長室にご挨拶にうかがった時だ。その折にこんな会話が合った。

「ところで河村先生は、だれかキマッタ人はおいででしょうか？」

「はあ？」

「いや、うちは女子大ですけえ……」

「ああ。一応この秋に式を挙げることになっておりますので、その点にご心配には及びません」

当時（今はもっと）風采のあがらなかつた私を、一応一人前の独身男性と見てくださったようだ。否、先生は、学生はみんな自分の孫だと思つて、悪いムシがつかないように、ムシになりそうな者にも、私のようななりそうにない者にも、慈悲深くも等しく殺虫剤を吹きかけられたのだ。

爾来九年間学園にお世話になつたが、その間の私は、ミキ先生にとってあまり好ましい教員ではなかつたに違いない。楽しく勤めさせていただいた私であつたが、唯一の苦痛は、一年に何回か学科毎に行う学長との懇談会であつ

た。そこで決まって話題に上るのは学生の生活指導で、中でも制服問題は「定番」であった。

「文教には立派な制服があるのに、学生はチットモ着ない！」

「先生、今どき大学で制服を着ろといっても無理ですよ」

「彼女らが着ているジーンズなんて、アメリカで作業着としてきたんですヨ。勉強するにはそれにふさわしい服が必要なんですッ。それに、制服にすれば、何を着ていくか毎朝悩まなくてもいいし、高い服を何着も買わずにすむから、本人にも親御さんにもためになるんですッ！」

このように制服の効用を滔々と力説される先生の前で、

「服というのは、着る人のいわば基本的人権の一部なんですから、大人の彼女らに押しつけるべきものではありませんよ」

という言葉をも、喉元のところで必死に押さえなければならなかったので（一度ぐらい口から漏れたかも知れないが）、懇談会が近づくと私の気分はブルーに染まるのであった。

文教にまだ制服があることは聞いていたが、先生のご葬儀で学生が着ているのを実見したところ、なかなかセンスがよい。いろいろと工夫を凝らしながら、ミキ先生の執念ともいべき教育方針が継承され続けていることを思い知らされ、半分先生に負けたような気になったり、いややはりあの時の自分の考えは間違っていないぞと思ひ直したり、複雑な気持ちになったものである。

思えばミキ先生は、普段着の似合う方であった。夏なら、昔でいう簡單服のようなワンピースを着て校舎内外を忙しく歩いておられたお姿が、少なくとも私には「教育者武田ミキ」にもっともふさわしいものと思われる。ある

年の夏の日曜日（調べてみると一九七八年七月九日）、私の関係する地方史研究団体が文教の教室をお借りして大会を開催した際、そんな大会があるとは認識しておられなかったミキ先生と（もちろん私は事前に先生の許可をいただいていた）ちよつとした押し問答になった若い係の者が、私のところに来て、

「ナンカ変なおばあさんがわからないことを言っていますが。」

女性の学長が全国に何人おられるか知らないが、近所のおばあさんと間違われる方はミキ先生ぐらいであろう。それは服装の問題もさることながら、経営者然としない先生の、内面から醸し出される庶民的雰囲気のをせるわざではあるまいか。今はもうつぶされてしまったテニスコートやグラウンドで、ジーンズなどではない日本の伝統的な作業着、すなわち、頭を手拭いで包み、モンペスタイルで草を引いておられる姿を目撃したこともある。「心の教育」を叫び続けられた先生には、胸に勲章を光らせた袴姿よりも、普段着の方が何倍もお似合いだったと、私は思う。制服論では先生と主張を異にしたが、先生の教育にかけられる情熱には到底かなわない。その情熱に先生のお顔はいつも輝いていた。ご葬儀で誦まれた蓮如の「白骨の御文」に「朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり」という一節があるが、ミキ先生は極楽浄土に行かれてもなお、あの情熱に満ちた少女のような紅顔で、阿弥陀様と熱っぽく教育論議を戦わせておられるはずである。その先生に再会できたならば、今度は喉元で押さえずに正面から制服について論戦を挑んでみたいと、今から密かに楽しみにしている。

合掌